

平成20年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立野々市明倫高等学校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
1 授業改善に努め、「わかる授業」、「考える授業」を実践し、学力の向上を図る。	① 研究授業を制度化する。	研究授業の年間実施回数が A 30回以上 B 20回以上 C 10回以上 D 10回未満	A	過去3年間の取組は概ね良好である。ただ、11・12月の飛び込み実施が多く、計画性が感じられない。各教科の、年間を通した計画が必要である。次年度は、例年通りの実施か、研究授業実施者を各教科で絞り研究協議を充実させるか、検討したい。
	② 生徒による授業評価を活用し、授業改善に役立てる。	授業評価の基準で総合評価が「非常に良好」と「良好」である教諭の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	全教科の平均 B	教員によって、また、教科によって評価に差があるものの、全体として概ね良好である。各教員、教科の問題点に対する改善策は必要であるが、次年度も達成度判断基準を変えずに実施したい。
	③ 学習習慣の定着を図る。	各クラスの平均家庭学習時間が、1・2年生で2時間以上、3年生で3時間以上確保している生徒が、 A 50%以上 B 40%以上 C 30%以上 D 30%未満	B	評価結果は概ね良好であるが、クラスによって差があり、家庭学習習慣がまったく定着していない生徒もいる。日々の家庭学習のための課題を各教科で検討し、生徒に明示する必要性を感じる。また、各学年で週末課題を出すなど工夫すべきである。 達成度判断基準は、次年度も同様でよいと思われる。
	④ 思考力・表現力の育成のため、3年間を通した小論文指導を行う。	小論文テストの判定が標準以上の生徒が、 A 90%以上 B 75%以上 C 50%以上 D 50%未満	C	10月実施の小論文模試の結果は、標準以上の生徒数が58%(25/43)だった。今年度の基準値が高すぎると思われるので、来年度はA70%以上、B60%以上、C50%以上、D50%未満とし、模試が実施される7月、10月に調査を実施する。また、小論文模試の受験者にリポート添削を受けさせることで、小論文の学力をより高めたい。「総合的な学習の時間」やSTテストを利用し、小論文指導について再考すべきである。 第2学年では、1～2学期に、週1回ST前に小論文練習を行ってきた。また、修学旅行に際し、クラス毎にテーマを決め調べ学習も行った。いずれも、多くの生徒が真摯な態度で取り組んでいた。思考力を働かせるためにはまず基礎知識の習得・社会的関心の育成が、また、表現力を身に付けるためには豊かなコミュニケーション体験、多様なプレゼンテーション体験が必要である。 次年度も学びの機会を増やすことが望ましい。
	⑤ 授業において情報機器を効果的に活用する。	A 授業で情報機器を月1回程度使用した B 授業で情報機器を学期に1回程度使用した C 授業で情報機器を年に1回程度使用した D 授業で情報機器を使用しなかった (※情報機器に視聴覚機器も含む)	2.3	プロジェクタ等を利用しやすくなったので、使用する教師が増加した。しかし、まだ年1回程度使用という人が多いので、プレゼンテーションの校内研修等の機会を増やし、また、機器の整備を進めていきたい。 (判定基準：A4点、B3点、C2点、D1点とし、全職員の平均が1.5未満の場合は改善策を検討)
学校関係者評価委員会の評価	<ul style="list-style-type: none"> ●授業評価等の取組が実際に学力向上につながっているのは素晴らしい。偏差値の度数分布をもう少し上位に動くよう尽力してほしい。 ●授業評価で、教師の方は良くなっているが、生徒自身の自己評価の方は向上していない。こちらを伸ばす方が重要ではないか。 			
学校関係者評価委員会の評価 結果を踏まえた今後の改善方針	<ul style="list-style-type: none"> ●授業評価や中間評価の結果を各教科で十分検証し今後の方針を立ててから、それをHPに公開し緊張感を高める。 ●研究授業や教科別研究会等をさらに主体的に進め、生徒の学習意欲を高め、考える力、表現する力を育成するための授業を推し進める。 			

2	生徒一人ひとりの個性にあった進路設計をうながし、全職員がそれぞれの立場から支援する。	① 定期的な進路情報の提供に努め、進路ガイダンスを充実させる。	学年別進路ガイダンスを A 3回以上実施 B 2回実施 C 1回実施 D 実施せず	A	各学年とも学年集会等で3回以上進路ガイダンスを実施した。来年度は5～6月にジョブカフェ石川の協力のもと、1年生を対象とした「文理選択につながる職業理解」「私のキャリアデザイン」などの進路ガイダンスを予定している。今年度は毎月1回以上「進路だより」を発行。また、年4回の学年進路ガイダンスの他、「卒業生と語る会」を実施した。生徒の進路設計の意欲を引き出す上で、効果的であったと考える。 次年度も、時期に応じて内容を精選しながら継続実施することが望ましい。さらに、外部講師を招いたガイダンスの充実や、担任以外の先生との懇談の機会拡充も、検討できるとよい。 保護者の満足度を上げるためには、意欲を高めた生徒が家庭学習に励む姿を見せる以外にないのではないかと思われる。
			自分の進路について A 常に真剣に考えることができた B 概ね真剣に考えることができた C 場合によって真剣に考えることができた D いつも真剣に考えることができなかった	2.7	1年生では大部分の生徒が真剣に考えている。自分の適性を知るための効果的な資料をさらに提供すべきである。 もっと総合の時間を進路ガイダンスに活用すべきである。担任が生徒と面談する時間をなかなかとれないのが現状である。 考えさせるための情報が、やや不足した。大学訪問等、意識を高める工夫が必要である。 (判定基準：A4点、B3点、C2点、D1点とし、平均が2.5未満の場合は改善策を検討)
			生徒に対する進路指導が A 適切で成果もあがっている B 適切であるが、成果は十分とはいえない C 十分行われているとは言えず、成果も不十分である D どんな指導が行われているのか分からない	B	昨年と同様の結果であり、保護者からの信頼は得られていると考えられる。今後も、新しい情報を得るために、外部講師による生徒向け進路ガイダンスや教職員の研修会の充実を進めていく。 2学期のコース選択に向けて1学期の間にもう少し指導が必要である。
		② 国公立大学への志望者数を増やし、合格者数を増やす。	1, 2年生(3年生)の夏季補習の出席率が A 95%(80%)以上 B 90%(70%)以上 C 80%(60%)以上 D 80%(60%)未満	B	1, 2年生の補習では毎朝STで出席確認をしたことが良い結果につながった。補習内容と実施日を、しっかりと検討する必要がある。 3年生についても良い結果が得られている。3年生では進路志望の変更で補習の必要なくなった生徒もいるので、出席すべき生徒を正確に把握しておく必要がある。また、補習の内容を充実させることが大切だ。 上級生の健闘が下級生にとって何よりの指針となる。上級生が挙げた成果を積極的に下級生に伝えることで、より高い目標設定を促し、補習への意欲的な参加につなげたい。
			センター試験の得点の平均点偏差値50以上の生徒が A 20人以上 B 15人以上 C 10人以上 D 10人未満	B	1年次から学力向上のための指導を行ってきたことが好結果につながった。本校の生徒は1～2年次の家庭学習時間が少ないので、今後ともこの時期での家庭学習時間が増加するように指導を続けていく必要がある。
			国公立大学合格者数が A 60人以上 B 50人以上 C 40人以上 D 40人未満	C	昨年度に比べ金沢大学や石川県立大学の合格者数は大きく増加したが、富山大学合格者数は大きく減少した。センター試験対策ばかりでなく2次試験に対応できる学力をつけさせる必要がある。そのためにも1～2年次の家庭学習時間を増やすことの大切さを生徒たちに理解させる必要がある。
		③ 先輩・教職員による講話を通して、自らの人生設計について考えさせる。	先輩・教職員との交流により視野を広げ、人生について考えるようになった生徒が A ほとんどである B 70%程度である C 約半数である D 一部である	C	1～2年生を対象に調査したため、低い数値となった。1～2年生では、人生について先輩・教職員と語り合う機会が少ない。進路指導課では2年生を対象として「卒業生と語る会」、2年勉強合宿での「先生方の体験談」などを実施しており、今後とも続けていきたい。「卒業生と語る会」や、勉強合宿での「先生の受験体験談」では、生徒が関心をもって聴いていた。特に、卒業生や教職員が「自己の弱さ」について語る時、生徒に訴えかける力が増す。 内容が①と重複していると思われるので、来年度は省略するか、「部活動では…」や「卒業生と語る会では…」というように具体的な名前をあげて調査すると答えやすいと思われる。上から下への情報伝達ではなく、横の情報伝達が重要と考える。 卒業生との懇談会等、ほとんどなく、学年集会、ホームでの指導が主であった。

2	生徒一人ひとりの個性にあった進路設計をうながし、全職員がそれぞれの立場から支援する。	④ 生徒の良好な人間関係作りを支援する。	面談実施率 A 70%以上 B 50%以上 C 30%以上 D 30%未満	B	アンケート結果をより有意義に活用するため、来年度はアンケートを実施する時間を十分に確保し、詳細な分析結果を各クラス担任に提供していく。 2年生に対しては、状況に応じて適切な面談が行われ、その結果、生徒の人間関係における問題点を的確に把握でき、生徒・保護者との信頼関係を深めることもできたと思われる。 人間関係作りの問題を抱える生徒に対しては、担任だけでなく複数の教師が関わり、互いに連携をとることが不可欠である。 課題としては、生徒・保護者との面談や教師間の情報交換に必要な時間の確保が困難であることがあげられる。トラブル等が、起こってからはもちろんのこと、起こる前にも学年会、相談室からの情報交換で対応することができた。
			いじめが A ない B 1件あった(ある) C 2件あった(ある) D 3件以上あった(ある)		C
学校関係者評価委員会の評価			<ul style="list-style-type: none"> ●頭ごなしに叱りつけるのではなく、生徒との約束と納得に基づいて指導がなされている点、評価できる。 ●マナー教育等において、地域住民としても大いに関わって学校を育てていきたい。 ●生徒指導を、教師により差ができないように徹底してほしい。 ●いじめが見られないことは安心できるが、油断のないように。 		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策			<ul style="list-style-type: none"> ●生徒を取り巻く情勢に合わせて校則を修正しながら、指導基準の共通理解を図る。 ●譲れない部分を守って全職員一丸となって指導にあたる。 ●少なくとも各学期に1回はいじめ調査を行い、兆しが見えたら即刻、関係職員全員で対応し、原因究明と再発防止に努める。 		
3	学校行事等あらゆる機会を利用して、生徒が自信に満ちた自主的な活動ができるよう、指導に工夫する。	① バランスのとれた体力の向上を図る	新体力テスト(握力・上体起こし)で、1回目よりも向上した生徒が A 75%以上 B 50%以上 C 25%以上 D 25%未満	B	筋力の向上は、継続したトレーニングが必要であり、2単位の授業だけでは限界がある。部活動と連携したり日常生活を通して意識させたり等の指導を工夫する必要がある。 握力は全国平均を下回ったが上体起こしは上回っていた。向上率が悪かったとはいえ全国平均を上回った種目については、次年度は測定種目を変更すべきである。 握力にクラス間のばらつきが見られたのは、測定機器の問題も考えられるので、次年度は測定機器の点検を行った後、実施したい。
		② 部活動の加入をうながし、学校全体の活性化を図る。	部活動加入率が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である		B
			A 非常に充実している B 充実している C あまり充実していない D 全く充実していない	B	顧問が忙しくなり、指導が手薄になる。業務の精選を再考すること。

3	学校行事等あらゆる機会を利用して、生徒が自覚的に満ちた自主的な活動ができるよう、指導に工夫する。	③ ボランティア活動への自発的な参加を促進するため、一斉にプルタブ集めを実行する。	プルタブを各クラスで、 A 100g以上回収した B 70g以上回収した C 50g以上回収した D 50g未満回収した	B	ボランティア部が中心となって各クラスで集めており、それなりの成果が出ている。今後も、生徒への啓発を続けていきたい。 生徒はあまり学校で缶飲料を購入しないので、空き缶はさほど多くない。各教室のプルタブ入れには、あまり入ってなかったような気がする。 次年度回収量を増やすとすれば、保護者へも呼びかけ、家庭から持ち込むことも必要である。
		④ 全員一斉清掃の徹底により、美化意識を高める。	A 常に監督箇所に出向き十分に指導、点検している B 監督箇所に出向き点検しているが、生徒の指導は十分ではない C 時々、監督箇所に出向き点検している D 指導も点検も十分していない	3.9	担任は常に監督箇所に出向き指導している。だが、複数箇所を同時に監督するため、清掃の徹底が難しい場合もある。 今後、教員一人当たりの監督箇所がさらに増えようと考えられるので、対策を講じる必要がある。 (判定基準：A4点、B3点、C2点、D1点とし、平均が2.5未満の場合は改善策を検討)
		⑤ 危機管理意識を高め、事故の防止と発生時の対応に万全を期す。	危機管理に関する校内教職員研修・訓練 A 年間5回以上行う B 年間3～4回行う C 年間1～2回行う D 全く行わない	A	今年度は4、5、9、10、11月にそれぞれ1回ずつ計5回、危機管理に関する教職員研修・訓練を実施した。研修・訓練を通して、危機管理に対する教職員の意識が向上した。実際の緊急場面でもとるべき行動を身につけることができた。
		⑥ 生徒の読書を促進する。	全学年の年間平均貸出冊数が A 220冊以上である B 200冊以上である C 180冊以上である D 180冊未満である <195冊>	C	今年度はよく借りる生徒が少なく生徒数減もあって、B目標には到達できなかった。今年度一番貸出が多かった3年生は卒業し、来年度はさらに2クラスの生徒減になるので今までの基準を変更する。「貸出冊数」を「利用冊数」にし、数値目標は、A200冊以上、B180冊以上、C160冊以上、D160冊未満 読解力・思考力・想像力等の養成のための読書・学習センター、また情報センターとしての役割も踏まえて、魅力ある図書館作りを考えていかなければならない。
		⑦ 保護者に、PTA主催行事や学校行事に積極的に参加してもらう。	総会、学年別懇談会、公開授業、教育ウィークにおける保護者の延べ参加率 A 60%以上 B 50%以上 C 40%以上 D 40%未満 「朝の挨拶運動」における保護者の参加率 A 60%以上 B 50%以上 C 40%以上 D 40%未満	B B	総会・学年別懇談会の出席者数は延べ人数で481名、参加率は55.0%(昨年52.1%)であった。保護者が出席しやすいように土曜日開催とし、当日は1限～5限まで授業公開し、生徒の学習の様子を観てもらった。 11月の「いしかわ教育ウィーク」における学校公開では、来校者が140名(昨年127名)に達した。教育ウィーク中の講演会の開催が増加の一因と考えられる。 参加者数482名、参加率55.5%(昨年55.1%)であった。「朝の挨拶運動」は年々参加率も増加しており、本校のPTA活動の柱として、確実に定着してきている。朝の登校の様子を見て、声をかけていただくことで、生徒の礼節・身だしなみの改善、遅刻の減少など好ましい効果が表れており、今後も本校の伝統として継続していきたい。今年度同様、継続実施が望ましい。
学校関係者評価委員会の評価		●学校評価計画そのものは良く作られているが、それだけに「C」の最終評価が目立ってくる。読書等については、施設的な問題がないのなら、今後とも目標達成のために尽力願いたい。 ●単にプルタブ集めでボランティア精神が育つか疑わしい面もある。教育の成果はこうした数値には表わしにくいものなので、10～20年先を見通した姿勢で適切な目標を設定されたい。			
学校関係者評価委員会の評価 結果を踏まえた今後の改善方針		●中間評価でDとなった図書貸し出し数は、図書室のレイアウトを変えたりクイズ等の工夫をこらし、後半大幅に伸ばすことができた。 ●「きちんとした」校風づくりは創立以来の基本的姿勢である。この伝統を大切に守っていく。			